考古学の成果を社会科教育に活かすための一考察

― 高校日本史教育における遺跡の取り扱い方 ―

山　田　精　一

群馬県立桐生高等学校

1．問題と目的
2．新学習指導要領における遺跡の扱いについて
3．教科高校「日本史」に登場する遺跡
4．まとめ

―― 要　旨 ――

筆者は、博学連携の望ましい在り方について検証を重ねている。具体的には学校教育と文化財行政の効果的な連携が求められているにも関わらず、実態に即した両者の連携に関する研究が未だ十分ではないことから、「学校教育と文化財行政の連携　－課題と展望－」をテーマに研究を推進している。本稿は、連携の形態として最も効果的であると考える、「教科教育と文化財行政」との連携に着目し、考古学の成果をいかに教科教育、特に高校日本史教育に活かしていくべきかについて考察したものである。

方法としては、考古学的手法に基づいて発掘調査された遺跡に着目し、現行の高校日本史教育の中で、遺跡がどのように位置づけられているのかという現状を分析し、そこで明らかにされた課題を抽出した上で、その解決に向けての具体的な方策について提言することとする。そのことによって、学校教育と文化財行政の両者が求められている役割が明確となり、学校教育現場ならびに文化財行政現場の連携が強化されるのと同時に、今後、それぞれの機関が担う新たな使命を、広く社会に浸透させていくことにつながると考えている。

キーワード
対象時代　現代
対象地域　日本
研究対象　社会科教育　遺跡　博学連携

1．問題と目的

高校では、平成 25 年度入学生より新学習指導要領に基づく教育が実施される。高校地理歴史科「日本史Ｂ」における今回の改訂では、「諸事象の本質をその歴史的な形成・展開過程の実証的な考察によってとらえる歴史的な見方や考え方を身に付け、歴史的な思考力の育成を図るとともに、国際社会に主体的に生き平和で民主的な国家・社会を形成する日本国民としての自覚と資質を養うこと」が、この科目の最終的なねらいであることが示された。こうしたねらいに迫る教育活動を効果的に実践していくにあたり、学校教育の領域だけではなく、博物館・資料館などの社会教育施設の活用、また、遺跡や遺物の見学・活用など、埋蔵文化財を取り入れていくことが重要視されている。つまり学校教育と文化財行政の効果的な連携が求められているのである。しかしその一方で、両者の連携に対する関心はそれほど高くなく、実態に即した研究が未だ十分ではないことから、筆者は「学校教育と文化財行政の連携　－課題と展望－」をテーマに研究を推進している。本稿は、連携の形態として最も効果的であると考える、「教科教育と文化財行政」との連携に着目し、考古学の成果をいかに教科教育、特に高校日本史教育に活かしていくべきかについて考察したものである。

本稿では特に考古学的手法に基づいて発掘調査された遺跡に着目し、現行の日本史教育の中で、遺跡がどのように位置づけられているのかという現状を分析し、そこで明らかにされた課題を抽出し、その解決に向けての具体的な方策について提言することとする。

2．新学習指導要領における遺跡の扱いについて

まず学校教育現場において、教育活動の指針となる学習指導要領について、その内容を確認しておきたい。

文部科学省は平成 21 年 3 月に学校教育法施行規則の一部改正と高等学校学習指導要領の改訂を行い、新高等学校学習指導要領は平成 25 年度の入学生より、年次進行により実施されることとなっている。[1] そこで科目高校「日本史Ｂ」[2] の目標は、新学習指導要領では次のように規定されている。

大項目１　目標

『<u>我が国の歴史の展開を諸資料に基づき地理的条件や世界の歴史と関連付けて総合的に考察させ</u>、我が国の伝統と文化の特色についての認識を深めさせることによって、歴史的思考力を培い、国際社会に主体的に生きる日本国民としての自覚と資質を養う。』（下線、筆者）

この目標は内容的に 3 部から構成されており、特に第 1 の部分（下線部）では、「日本史 B」の基本的な性格を示している。実際の指導にあたっては、我が国の原始から現代に至る歴史の展開を、地理的条件や世界史と関連づけ、歴史を構成する要素（政治・経済・文化など）を総合した、幅広い知見で大きく把握させるようにすることが重要であり、特に、「諸資料に基づき」文末で「考察させる」と指摘しているように、生徒自らが歴史資料に基づき調べ考えることに重点をおいている。

ここで歴史資料に基づき「考察させる」学習活動を展開していくのにあたり、考古資料を用いることの有用性が、以下の一部の中項目において指摘されているので紹介したい。

日本史学習指導要領では大項目２「内容」がそれぞれ以下の中項目に項立てされている。

高等学校学習指導要領　第２章　第２節　地理歴史
第２款　各科目　第４　日本史Ｂ　２　内容
（１）原始・古代の日本と東アジア
（２）中世の日本と東アジア
（３）近世の日本と世界
（４）近代日本の形成と世界
（５）両世界大戦期の日本と世界
（６）現代の日本と世界

上記中項目は、原始よりはじまり徐々に新しい時代へと進行し、最後は現代へと至る歴史記述をもとに構成されている。この中で、学習指導要領の目標を達成させる方法として考古資料の活用が有効的と思われる中項目について、取り上げてみたい。

まず、中項目「（１）原始・古代の日本と東アジア」である。本項目は小項目「ア　歴史と資料」「イ　日本文化の黎明と古代国家の形成」「ウ　古代国家の推移と社会の変化」で構成されており、特に「ア　歴史と資料」が「日本史 B」全体の導入として位置づけられていることが特徴的である。

【ア　歴史と資料】
遺跡や遺物、文書など様々な歴史資料の特性に着目し、資料に基づいて歴史が叙述されていることなど歴史を考察する基本的な方法を理解させ、歴史への関心を高めるとともに、文化財保護の重要性に気付かせる。

ここでは、「様々な歴史資料の特性」に着目して「資料に基づいて歴史が叙述されていること」などについての理解を図り、歴史に対する生徒の関心を高めると共に、文化財を保護することの重要性に気付かせることをねらいとしている。歴史資料には実に様々なものがあり、それらはそれぞれに特長を有しその固有性をもっている。

古文書などの文献資料、絵画・地図・写真・映像なども含めた様々なものが歴史資料としてあげられ、そのうちのひとつに、遺跡・遺物などの考古資料があることに気付かせる。そして、考古資料に基づき、その特性をふまえ歴史的思考力を養っていく指導を展開していくという方法が考えられる。

次に中項目「（２）中世の日本と東アジア」である。本項目は小項目「ア　歴史の解釈」「イ　中世国家の形成」「ウ　中世社会の展開」で構成されており、「ア　歴史の解釈」で、考古資料を用いることの有用性を指摘することが可能である。

【ア　歴史の解釈】
歴史資料を含む諸資料を活用して、歴史的事象の推移や変化、相互の因果関係を考察するなどの活動を通して、歴史の展開における諸事象の意味や意義を解釈させる。

ここでは例えば、ある時代の政治を学習する際に、根拠となる日記や文書などの文献資料を読むことや、社会を考察する際に絵図や絵巻物などの絵画資料を読み解くこと、また、遺跡や遺物などの出土資料を題材としてその時代像を描かせることなどが考えられる。それぞれの資料的特性に留意させるとともに、そこからわかる歴史的事象が歴史の展開にどう位置づけられるのかを考察し解釈させることを重視する。

中世は、考古資料のみならず文献資料、絵画資料をはじめ、原始・古代に比べ多くの地域で資料が豊富になり、社会の多様な側面を様々な資料を用いて学習することが可能となる時代である。そうしたことから、地域の特性に応じた適切な資料の選択が可能となり、当然、地域学習・郷土学習としての位置づけも可能である。よって、単元学習と地域学習（郷土学習）両者の関連性を深めながら学習をすすめることにより、理解がより一層深まると考えられる。

以上、学習指導要領の記述から、直接、考古資料活用の有用性が指摘できる項目として、中項目「（１）原始・古代の日本と東アジア」、並びに「（２）中世の日本と東アジア」について言及した。つまり時代でいうと、原始から中世に該当する。しかしこのことは、近世以降の時代においても決して無視することは出来ないはずである。基本的な考え方は同様で、考古資料の資料的特性に留意させ、それを単元のねらいに近づけていくという方法自体にかわりはない。

３．教科高校「日本史」に登場する遺跡

以上、学習指導要領から読み取れる遺跡・遺物を中心とした考古資料活用の有用性を確認した上で、本項では教科高校「日本史」に登場する遺跡を抽出し、実際の日本史教育の現場で、遺跡がどのように扱われているのかについて分析することとする。そのことを通じ、実際に高校日本史教育の中で遺跡を取り扱うのにあたり生じる課題が明らかにされ、その対応策について触れてみたい。

分析の対象としたのは、主たる教材となる教科用図書[3]（以下、教科書）と、副教材である写真図版・地図・年表などの資料をまとめている図説[4]の２種類とした。

山川出版社発行の教科書「詳説日本史Ｂ」は、現在、全国で最も多くの高校で採用されている教科書の一つであり、今日の高校日本史教育の実態を反映するのに最も適当と考え、分析の対象とした。また副教材「日本史のライブラリー」は、数ある図説の中でも図版（写真資料・イラスト・絵図等）が最も豊富で、実際に授業で使用することを想定した場合、本来の図説としてのニーズに十分耐え、また利用価値が最も高いと判断し、分析の対象とした[5]。

以下、教科書もしくは図説のいずれかに採用されている遺跡を時代順に掲げた。なお、各遺跡の位置づけを下記の要領で分類した。遺跡名末の（　）内の記号は、下記凡例を参照されたい。

凡例
Ａ～政治史の領域として位置づけられている遺跡[6]
Ｂ～社会・経済史の領域として位置づけられている遺跡[7]
Ｃ～文化史の領域として位置づけられている遺跡[8]
Ｄ～生活史の領域として位置づけられている遺跡[9]
Ｅ～史学史の領域として位置づけられている遺跡[10]
Ｆ～遺物の出土地として紹介されている遺跡[11]
Ｇ～その位置のみ、地図上で図示されている遺跡

（１）旧石器時代

モシリ貝塚：北海道（Ｆ）、貫ノ木・日向林Ｂ遺跡：長野（Ｆ）、野尻湖遺跡：長野（Ｆ）、樽岸遺跡：北海道（Ｆ）、白滝遺跡：北海道（Ｆ）、金取遺跡：岩手（Ｆ）、花泉遺跡：岩手（Ｆ）、岩宿遺跡：群馬（Ｅ）（Ｆ）、竹佐中原遺跡：長野（Ｆ）、はさみ山遺跡：大阪（Ｄ）、福井洞穴遺跡：長崎（Ｆ）、早水台遺跡：大分（Ｆ）、砂川遺跡：埼玉（Ｆ）、上白滝８遺跡：北海道（Ｆ）、置戸安住遺跡：北海道（Ｇ）、大平山元遺跡：青森（Ｇ）、茂呂遺跡：東京（Ｇ）、月見野遺跡：神奈川（Ｇ）、上ノ平遺跡：長野（Ｇ）、茶臼山遺跡：長野（Ｇ）、浜北遺跡：静岡（Ｇ）、国府遺跡：大阪（Ｇ）、上黒岩遺跡：愛媛（Ｇ）

旧石器時代で登場する遺跡数は、23 遺跡である。

旧石器時代における遺跡の位置づけは明瞭で、その多くの遺跡が（F）に分類されている。つまり、出土した遺物（多くは石器。まれに骨角器、黒曜石等の石材、獣骨化石を含む。）の出土地としての意味付けが与えられているにすぎない。このことは、現在各地で旧石器時代の遺跡が発掘調査され、調査成果が積み上げられてきているにも関わらず、当時の人々の生活実態はまだ不明確な部分が多く、考古学の範疇で解明されている事象も限られており、そのため学校教育においても旧石器時代に関しては、遺跡を通じて扱うことが出来る範囲にも限界があることを示している。更に付言すれば、学校現場ではいわゆる「旧石器ねつ造事件」以降、旧石器時代に関して考古学の成果に対する不信感はいまだ払拭されておらず、特に考古学を専門としていない教員ほど、その傾向が強いという実態がある。実際、教科書の記述はもとより、図説における旧石器時代の遺跡の扱い方についても、事件前と事件後では大きな相違がみられるのも事実である。

そうした中、はさみ山遺跡では出土した柱穴の全体写真が掲載されており、当時の住居の構造がはじめて判明したことが紹介されている。さらに当時の住居の復元図（イラスト）[12] まで掲載されており、具体的な生活実態が不明な点の多いなか、旧石器時代人の生活の様子をイメージさせるのに好資料となっている。このように教科書・図説ともに岩宿遺跡などのわずかな例をのぞき、遺物の出土地としての位置づけしか与えられていない旧石器時代の遺跡において、はさみ山遺跡に関しては特異なケースとして指摘できよう。

（2）縄文時代

正福寺遺跡：福岡（F）、梨木平遺跡：栃木（D）、大串貝塚:茨城（B）、藤岡貝塚:栃木（B）、花輪台貝塚:千葉（B）、加曽利貝塚:千葉（B）、姥山貝塚:東京（B）、真福寺貝塚:埼玉（B）、堀之内貝塚:千葉（B）・（F）、大森貝塚:東京（B）・（E）、南堀貝塚:神奈川（B）、菊名貝塚：神奈川（B）、夏島貝塚：神奈川（B）、諸磯貝塚：神奈川（B）、大曲遺跡：北海道（G）、東釧路貝塚：北海道（G）、御殿山遺跡：北海道（G）、住吉町遺跡：北海道（G）、サイベ沢貝塚：北海道（G）、是川遺跡：青森（G）、大洞貝塚：岩手（G）、吹浦遺跡：山形（G）、大木囲遺跡：宮城（G）、三貫地貝塚：宮城（G）、寺脇貝塚：福島（G）、加茂遺跡：千葉（G）、馬高遺跡：新潟（G）、長者ヶ原遺跡：新潟（G）、栃原遺跡：長野（G）、井戸尻遺跡:長野（G）、氷見貝塚:富山（G）、大境洞穴遺跡:富山（G）、チカモリ遺跡：石川（G）、伊川津貝塚：愛知（G）、北白川遺跡：京都（G）、高山寺貝塚：和歌山（G）、黄島貝塚：岡山（G）、サルガ鼻遺跡：島根（G）、上黒岩岩陰遺跡：愛媛（G）、岩田遺跡：山口（G）、宿毛貝塚：高知（G）、鐘ヶ崎貝塚：福岡（G）、御領貝塚:熊本（G）、阿高貝塚:熊本（G）、曽畑貝塚：熊本（G）、黒川遺跡：鹿児島（G）、指宿遺跡：鹿児島（G）、ナスナ原遺跡：東京（F）、表館遺跡:青森（F）、館平遺跡:青森（F）、上野原遺跡:鹿児島（B）・（F）、二ッ木貝塚：千葉（F）、天神遺跡：山梨（F）、大光寺遺跡：富山（F）、花上寺遺跡:長野（F）、椎塚遺跡: 茨城（F）、亀ヶ岡遺跡:青森（F）、有田遺跡：福岡（F）、板付遺跡：福岡（B）、菜畑遺跡:佐賀（B）、尖石遺跡:長野（B）（D）、大湯遺跡:秋田（B）、真脇貝塚:石川（F）、津雲貝塚:岡山（F）、吉胡貝塚:愛知（F）、鳥浜貝塚:福井（F）、泉福寺洞穴遺跡：長崎（F）、曽利遺跡：長野（F）、三田谷Ⅰ遺跡:島根（F）、与助尾根遺跡：長野（D）、貝の花貝塚：千葉（B）、蜆塚貝塚：静岡（D）、金生遺跡：山梨（D）、棚畑遺跡：長野（F）、郷原遺跡：群馬（F）、宮田遺跡:東京（B）・（F）、恵比寿田遺跡:宮城（F）、三内丸山遺跡：青森（A）・（B）・（C）・（D）・（F）

縄文時代で登場する遺跡数は、78 遺跡である。

他の時代に比べ、多くの遺跡が取り上げられているのは、考古資料が歴史を考察する上での資料となり得る、最も適している時代のひとつが縄文時代である、ということを表している。例えば、草創期から晩期に至る縄文土器の器形の変遷を土器の全体写真を用いた一覧表を資料として用いることにより、その形状の特質・用途を推測させ、縄文時代の生活の様子を考察させる。このことにより、資料に基づいて歴史が叙述されることを理解させることが可能となる。

また、「日本史Ｂ」の最初に学ぶ単元である中項目「（１）原始・古代の日本と東アジア」においては、「考古学等による新しい事実の解明によって、歴史が書き改められつつあることに気付かせることも重要である。」と日本史教育における遺跡の扱い方に関する留意点が述べられている。そうした観点から、原始においては世間を賑わした遺跡などは、特にトピック的に紹介されている。縄文時代の場合はやはり三内丸山遺跡がそれにあたる。ほとんどの図説で、三内丸山遺跡については特別編集されており、その紹介に多くのページを割いている。本稿で取り上げている図説では、三内丸山遺跡は「最大の縄文集落」「三内丸山遺跡の出土品にみる縄文時代の交易」という２つの項目が設定され、生活史と社会経済史（流通史を含む）にわたる、複数の領域に位置づけられている。以下、三内丸山遺跡を事例に、実際の資料を紹介す

ることとする。

項目「最大の縄文集落」では、青森県教育庁文化財保護課三内丸山遺跡対策室が所蔵する、遺跡の復元模型の全体写真が掲載され、建物跡から復元された集落の様子が一望できるように編集されている。その資料の解説は以下のとおりである。

『三内丸山遺跡は、今から約 5500 年前～ 4000 年前（縄文時代前期～中期）の日本最大級の縄文時代の集落跡である。1992 年からの発掘調査で、集落全体の様子や当時の自然環境などが具体的にわかってきた。また、膨大な量の縄文土器、石器、土偶、土･石の装身具、木製品、骨角器、他の地域から運ばれたひすいや黒曜石なども出土している。ヒョウタン、ゴボウ、マメなどの栽培植物が出土し、DNA 分析によりクリを栽培していたことが明らかになるなど、数多くの発見が縄文文化のイメージを大きく変えた。』（下線、筆者）

まず下線部の日本最大級の縄文集落であることが、復元模型で再現された竪穴住居群・高床建物群・大型竪穴住居・大型掘立柱建物・道路・盛土遺構・墓域などからイメージすることが可能である。そして、出土した数々の遺物より、三内丸山遺跡での生活実態、他地域との交流についても推測の範囲が広がっていく。更には自然科学的分析の成果を用いて、当時の生産構造についても理解を拡げていくことが可能となっている。

次に項目「三内丸山遺跡の出土品にみる縄文時代の交易」では、日本地図上に三内丸山遺跡を図示した上で、遺跡から出土した各遺物の産地がそれぞれ図示され（ひすいが産出された糸魚川、同じく黒曜石の和田峠など）、交易のネットワークが存在していたことを説明している。そこにはアスファルトの付着した石鏃、黒曜石の石匙、ひすい製品などの全体写真も掲載されている。このように三内丸山遺跡から縄文時代について学ぶことは多岐にわたることがわかる。三内丸山遺跡は実際の学校現場における日本史教育のなかで、活用の可能性が高い遺跡であると言えよう。

このように、東日本を中心に豊富な発掘調査事例に裏付けされた縄文時代は、高校日本史の中で、最も考古資料の活用が効果的な単元のひとつであるといえよう。

（3）弥生時代

具志原貝塚：沖縄（C）、恵山貝塚：北海道（C）、砂沢遺跡：青森（B）、垂柳遺跡：青森（B）、土井ヶ浜遺跡：山口（F）、唐古・鍵遺跡：奈良（B）・（F）、弥生町遺跡：東京（C）・（F）、山木遺跡：静 岡（F）、板付遺跡（B）・（F）、吉野ヶ里遺跡：佐賀（A）・（B）、須玖岡本遺跡：福岡（A）・（F）、登呂遺跡：静岡（B）・（D）・（E）・（F）、百間川遺跡：岡山（B）、池上曽根遺跡：大阪（F）、池上遺跡：大阪（F）、辻田遺跡：福岡（F）、拾六町ツイジ遺跡：福岡（F）、亀井遺跡：大阪（F）、石川条里遺跡：長野（F）、里田原遺跡：長崎（F）、鬼虎川遺跡：大阪（F）、生立ヶ里遺跡：佐賀（F）、扇谷遺跡：京都（B）、大塚遺跡：神奈川（B）、朝日遺跡：愛知（A）、青谷上寺地遺跡：鳥取（A）・（F）、紫雲出川遺跡：香川（A）・（F）、藤崎遺跡：福岡（D）・（F）、歳勝土遺跡：神奈川（D）、花園遺跡：広島（D）、妻木晩田遺跡：鳥取（D）、有珠モシリ遺跡：北海道（G）、枡形囲遺跡：宮城（G）、南小泉遺跡：宮城（G）、天王山遺跡：福島（G）、十王台遺跡：茨城（G）、野沢遺跡：栃木（G）、日高遺跡：群馬（G）、箱清水遺跡：長野（G）、座光寺原：長 野（G）、久ヶ原遺跡：山梨（G）、三殿台遺跡：神 奈川（G）、伊場遺跡：静岡（G）、瓜郷遺跡：愛知（G）、大中の湖南遺跡：滋賀（G）、深草遺跡：京 都（G）、田能遺跡：兵庫（G）、加茂遺跡：兵庫（G）、福田遺跡：島根（G）、竜河洞遺跡：高知（G）、田村遺跡：高知（G）、古照遺跡：愛媛（G）、入田遺跡：高知（G）、立屋敷遺跡：福岡（G）、免田遺跡：熊本（G）、加茂岩倉遺跡：島根（A）・（F）、神庭荒神谷遺跡：島根（A）・（F）、齋藤山遺跡：熊本（C）・（F）、東奈良遺跡：大阪（F）、原の辻遺跡：長崎（A）・（B）・（F）

弥生時代で登場する遺跡数は、60 遺跡である。

弥生時代で紹介されている遺跡の特長は、前時代に比較し飛躍的に政治史の領域として位置づけられている遺跡が多くなることである。弥生時代における教科書の記述は、まず単元「弥生文化の成立」で水稲耕作、金属器の使用、弥生土器の登場など、朝鮮半島との関係の中で文化が育まれたことを学び、弥生文化の特長について確認する。続く単元「弥生人の生活」では、稲作で使用される工具・施設・水田の種類などを学び、稲作工程への理解を深め、さらに環濠集落の特性とその成立の背景を学ぶ。同時に、死者に対する葬法・墓制・青銅製祭器などについても触れ、弥生時代の人々の信仰・精神世界への理解をうながしている。次の単元「小国の分立」では、「クニ」としての政治的まとまりの登場と、それを統率する小国の王について触れるが、ここでは『漢書』地理志･『後漢書』東夷伝などの中国の文献を資料として用い、東アジア地域における倭国の位置づけについて、世界史的な視点から学習することとなる。もちろんここで、考古資料としては志賀島出土の金印が取り上げられる。文献資料と考古資料がそれぞれ補完しあい、歴史思考力を養うことができる好例といえよう。そして弥生時代最後の単元は「邪馬台国連合」で、ここに至り古代日本の小国家連合の成立と推移を政治史的に把握し、次代のヤマト政権との関係性を考察させる。

このように弥生時代では、小国の形成や互いの抗争と邪馬台国によるそれらの連合という大きな歴史の流れを把握することを目的のひとつとしているため、必然的に扱う遺跡の内容も、政治史的領域に分類されるもの（分類のＡ）が散見されるようになる。ここでは遺跡や遺物が、従来の旧石器時代・縄文時代で扱われていたような身近な生活そのものに関わるのではなく、広く人間生活やそれを越えた集団、政治的つながりにまで関わることを意味している。このことは、考古資料の持つ意味を多様に解釈することが求められ、学習指導要領大項目の「目標」に明示されている、「諸資料に基づき地理的条件や世界の歴史と関連づけて総合的に考察させ」ることに適当な単元と学習方法の組み合わせであると考えられる。

（4）古墳時代

塔の首遺跡：長崎（B）・（F）、三雲南小路遺跡：福岡（D）・（F）、平原遺跡：福岡（D）・（F）、宇木汲田遺跡：佐賀（B）・（F）、立岩遺跡群：福岡（F）、箸墓古墳：奈良（A）、朝日１号墳：愛知（A）、楯築墳丘墓：岡山（A）、ホケノ山古墳：奈良（A）、黒塚古墳：奈良（A）、行灯山古墳：奈良（A）、渋谷向山古墳：奈良（A）、黄金塚古墳：大阪（A）、大仙陵古墳：大阪（A）、誉田御廟山古墳：大阪（A）、五色塚古墳：兵庫（A）、造山古墳：岡山（A）、江田船山古墳：熊本（A）、藤ノ木古墳：奈良（A）、石舞台古墳：奈良（A）、丸山古墳：奈良（A）、新沢千塚：奈良（A）、岩瀬千塚：和歌山（A）、雪野山古墳：滋賀（A）・（F）、物集女車塚古墳：京都（A）・（F）、仲津媛陵古墳：大阪（A）・（F）、角塚古墳：岩手（G）、雷神山古墳：宮城（G）、虎塚古墳：茨城（G）、埼玉古墳群：埼玉（A）・（F）、吉見百穴：埼玉（A）・（F）、観音山古墳：群馬（G）、高松塚古墳：奈良（A）、西都原古墳群：宮崎（A）、岩戸山古墳：福岡（A）、竹原古墳：福岡（A）、石塚山古墳：福岡（G）、作山古墳：岡山（G）、造山古墳：岡山（G）、浦間茶臼山古墳：岡山（G）、黄金塚古墳：大阪（G）、椿井大塚 山古墳：京都（G）、森将軍塚古墳：長野（A）、天神山古墳：群馬（A）、会津大塚山古墳：福島（G）、黒井嶺遺跡：群馬（B）・（G）、三ッ寺Ｉ遺 跡：群馬（B）・（D）・（G）、上石津ミサンザイ古墳：大阪（A）、土師ニサンザイ古墳：大阪（A）、五社神古墳：奈良（A）、ウワナベ古墳：奈良（A）、市庭古墳：奈良（A）、古市古墳群：大阪（A）、松林山古墳：静岡（F）、島田塚古墳：佐賀（F）、鴨稲荷山古墳：滋賀（F）、東之宮古墳：愛知（F）、将軍山古墳：埼玉（F）、金鈴塚古墳：千葉（F）、宮地嶽古墳：福岡（F）、十善ノ森古墳：福井（F）、長瀞西古墳：群馬（F）、岡田山１号墳：島根（A）・（F）、稲荷台１号墳：千葉（A）・（F）、大庭寺遺跡：大阪（B）、宝塚１号墳：三重（F）、今 城塚古墳：大阪（F）、瀬戸ヶ谷古墳：神奈川（F）、庵寺山古墳：京都（F）、沖ノ島 21 号遺跡：福岡（B）、陵山古墳：大阪（G）、室大墓：奈良（G）、コナベ古墳：奈良（G）、弁天山古墳：大阪（G）、乳の岡古墳：大阪（G）、田出井山古墳：大阪（G）、津堂城山古墳：大阪（G）、仲ッ山古墳：大阪（G）、墓山古墳：大阪（G）、市ノ山古墳：大阪（G）、前の山古墳：大阪（G）、岡ミサンザイ古墳：大阪（G）、ボケ山古墳：大阪（G）、白髪山古墳：大阪（G）、西殿塚古墳：奈良（G）、東殿塚古墳：奈良（G）、ヒシャゲ山古墳：奈良（G）、西山塚古墳：奈良（G）、島ノ山古墳：奈良（G）、室宮山古墳：奈良（G）、巣山古墳：奈良（G）、築山古墳：奈良（G）、新木山古墳：奈良（G）、狐井城山古墳：奈良（G）、雲崗石窟寺院第２０洞：中国（C）、竜門石窟：中国（G）、アジャンター石窟寺院：インド（C）、パルテノン神殿：ギリシア（C）、法隆寺若草伽藍跡：奈良（C）、藤原宮跡：奈良（A）、山田寺跡：奈良（A）、田中宮跡：奈良（G）、小墾田宮跡：奈良（G）、豊浦宮跡：奈良（G）、飛鳥池攻防遺跡：奈良（G）、浄御原宮跡：奈良（A）、川原宮跡：奈良（G）、天武・持統天皇陵：奈良（G）、水城跡：福岡（A）、本薬師寺跡：奈良（C）、三日市Ａ遺跡：石川（B）

本項では、政治史的な記述を重視する教科書の編成にならい、古墳時代に飛鳥時代を含んで分析を行った。

古墳時代で登場する遺跡数は、112 遺跡である。

古墳時代における遺跡の分類の特長をあげると、政治史の領域として位置づけられているケース（分類のＡ）と、遺物の出土地として紹介されているケース（分類のＦ）、地図上でその位置を取り上げているケース（分類のＧ）が多いことに気付く。

まず、古墳時代の学習では、最初の単元で古墳時代を前期・中期・後期に分け古墳文化の変遷を概観するが、その際に古墳の形態・主体部の構造、副葬品・埴輪の相違から、被葬者の人物像を考察させ、当時の社会の様子、特に政治の仕組み（被葬者の政治的、社会的役割）について考えさせている。その際、それぞれの時期における事例として複数の古墳が紹介されていることが、分類の（A）が多くなっている理由である。考古学的見地によって解明された古墳に帰属する性格が、それぞれの社会の在り方を反映していることから、古墳という遺跡の観察が、歴史的思考力を養う重要な活動に結実しているといえよう。

続いて分類の（Ｆ）が多くなっている背景について考えたい。古墳の特徴のひとつに様々な副葬品・埴輪が伴

うことがあげられるが、特徴的な副葬品・埴輪については、写真図版などで個々取り上げられている。そのなかでも特に江田船山古墳出土の鉄刀や稲荷山古墳出土鉄剣、岡田山１号墳出土大刀などの考古資料については、当然、写真図版で掲載されているがそうした遺物の紹介のみならず、記銘されている文字の解釈にまで触れ、当時のヤマト政権の支配権に関する政治的背景、部民制などに関する社会的背景にまで歴史的思考力を拡げる資料として扱われている。

そうした中、古墳時代で扱われている遺跡で特徴的なのは、三ッ寺Ⅰ遺跡の扱い方である。「古墳時代の人々の暮らし」という項目で、５世紀後半の榛名山東南麓の集落として紹介されている。ここでは東南麓の景観を再現した復元模型、榛名山の噴火で埋もれた黒井嶺遺跡の集落の復元模型、三ッ寺Ⅰ遺跡の豪族居館の復元模型が掲載されている。こうした資料の配置により、保渡田古墳群の被葬者の支配領域と、それを支える生産域についての空間認識を高め、古墳時代の社会景観をかなり具体的に考察することができる配慮がなされている。特に、堀で囲まれている三ッ寺Ⅰ遺跡の復元模型と、実際に発掘調査された群馬県教育委員会提供の豪族居館の石を張った堀の写真を比較して紹介しており、学習者はこれにより具体的にイメージすることが可能となり、歴史的興味関心を高める効果が高いと思われる。

なお、古墳時代の遺跡に雲崗石窟寺院・竜門石窟・アジャンター石窟寺院・パルテノン神殿などの外国の遺跡が含まれているのは、推古朝の仏教興隆政策に伴い発展した日本初の仏教文化である飛鳥文化において、諸外国からの影響を受けながら発展していった文化の国際性を理解するために紹介されているからである。

このように古墳時代においては、発掘された調査事例が全国的にみても多くなっていることも反映し、政治史的領域・社会経済史的領域・生活史的領域など、多種多様な取り扱われ方がなされていることがわかる。政治的基盤も徐々に整備され、原初的な統治組織が確立されるのに伴い、人々の生活も多様化していく古墳時代の社会実態について考察するのに、多様な遺跡が考古資料として紹介され活用されることは、日本史教育における遺跡活用の有用性という面からは大変好ましいことだと考えられる。

（５）奈良・平安時代

飛鳥池遺跡：奈良（Ｂ）、多賀城：宮城（Ａ）、村上遺跡：千葉（Ｄ）、平城宮跡（Ａ）・（Ｂ）、長屋王邸宅跡（Ａ）・（Ｄ）

奈良・平安時代で登場する遺跡は、わずか５遺跡である。

飛鳥池遺跡は奈良時代に鋳造された皇朝十二銭との関係で、富本銭が出土したことで触れられており、富本銭の鋳棹の写真図版とともに紹介されている。

多賀城は中央政府の蝦夷対策拠点として、政庁の復元模型と政庁周辺の地形（復元模型）の写真図版とともに紹介されている。それら写真図版資料により、その立地と構造について注意をうながすよう配慮され、防衛的施設であることから標高約 60m の丘陵先端部に位置していることと、発掘調査の成果により築地で囲まれた施設であったことが紹介されている。

奈良・平安時代の遺跡で紙面を割いて紹介されているのは長屋王邸宅跡である。使用されている図版は、「長屋王邸宅の復元模型」・「長屋王邸宅跡出土木簡」・「貴族の食事」・「農民の食事」[13]（図版のキャプションのまま）である。これら写真図版からもわかるように、長屋王邸宅跡から出土した、種々の食材・産物が記された荷札として利用された木簡により、長屋王の権勢の実態（政治史的な課題）と当時の貴族の生活（生活史的な課題）を考えさせる資料となっている。その一方で、同時に農民の食事についても紹介され、政治史としての歴史認識だけでなく、当時の身分差などの社会的構造についても考察させる工夫がなされていることは注目に値する。教科書では長屋王の右大臣就任に伴い、藤原氏の地位に危機感を抱いた藤原４氏が、策謀により長屋王を自殺させた「長屋王の変」に関する記述となっているが、そうした史実を補う形で教科書欄外部で、『平城京にあった長屋王邸宅の遺跡が発掘されている』と紹介されている。長屋王邸宅跡の遺跡そのものは控えめな扱いではあるが、文献史学と考古資料がそれぞれに補完し合い、「長屋王の変」に対する歴史的思考力を養うことが出来る好資料といえる。

奈良時代以降、律令制の整備と共に文献資料が充実の度合いを高め、歴史解釈の主たる資料となっていくのと軌を一にして、この頃から考古的資料が歴史認識の材料として扱われるケースが少なくなっていく。日本史教育においても同様で、奈良・平安時代の社会の様子を考古資料を用いて考察させるという機会が減少していき、そうした動向が教材で扱われる奈良・平安時代の遺跡の減少の背景となっている。

（６）鎌倉・室町時代

防塁跡：福岡（Ａ）、足利学校：栃木（Ｃ）、草戸千軒遺跡：広島（Ｂ）、一乗谷：福井（Ｂ）、首里城：沖縄（Ａ）、十三湊遺跡群：青森（Ａ）・（Ｂ）

鎌倉・室町時代で登場する遺跡も少なく、わずか６遺

跡である。

防塁跡は鎌倉期、文永の役後、異国警固番役で九州各国の御家人を動員して築いた石塁として、現存する遺構の写真図版が掲載されている。

足利学校は地方伝播を特長とする室町文化で取り上げられている。

特に中世で注目したいのは、流通の発達に伴い港町や城下町などの都市の発達がめざましいことである。そこで瀬戸内海の水運で栄えた港町として草戸千軒遺跡が紹介され、復元模型が遺跡の空撮写真を補う形で掲載されている。十三湊遺跡群が紹介されているのも、同様の理由による。

また戦国大名朝倉氏の城下町として名高い一乗谷では、空撮による一乗谷の全景写真とともに、城下で発掘された紺屋跡の出土状況を写真図版で紹介している。

幕府権威の失墜に伴い、庶民の政治的関心が希薄化していく中世では、相対的に経済･流通が活発化していく。そのことに対する理解を深める遺跡として、少数ではあるが、草戸千軒遺跡・十三湊遺跡群などが紹介されているのは注目に値する。

4．まとめ

前章では学習指導要領の記述から、直接、考古資料活用の有用性が指摘できる項目であると判断した、中項目「（1）原始・古代の日本と東アジア」、並びに「（2）中世の日本と東アジア」について、原始から中世にいたる各時代に登場する遺跡について分析した。旧石器時代の遺跡から抽出を開始し、古墳時代で登場する遺跡数は最大値となり、次の奈良・平安時代以降は激減することがわかった。

この傾向は近世を経て近現代へと続き、近世では安土城：滋賀（A）、春日山城：新潟（G）、稲葉山城：岐阜（G）、備中高松城:岡山（G）、肥前名護屋城:佐賀（G）、御土居：京都（A）、鎌原遺跡：群馬（B）が登場するのみである。

考古資料の扱いの低さが目立つ結果となってしまったが、近世以降の遺跡も随時発掘調査されており、報告事例も蓄積されている。よって、教員のアプローチ次第で適切な考古資料を活用することにより、単元の目的にかなう実践が可能となるはずである。例えば安土城(滋賀)の発掘成果などを教材化することにより、山城から平山城へと城の立地が変化していくのに伴い、戦法の変遷とともに、領国支配の形態の変化、地域指導者の政治的役割、地域社会における城郭の意味など、幅広く考察することが可能となる。

続く近現代では、品川台場：東京（A）、松代大本営：長野（A）、旧 731 部隊研究施設跡：中国（A）のわずか 3 遺跡が登場するのみである。近現代という時代の特質から、戦跡関係がそのほとんどを占めているのがわかる。近現代においても、近世同様、「どこにどのような遺跡があるか」、「どんな発掘調査成果が報告されたか」という、教員による考古資料の認知の度合いにその活用の成否が関わっており、扱い方によっては大変興味深い実践が十分に可能な時代ではないかと考える。例えば、東京都下の発掘調査により、第二次大戦中の空襲において受けた被害の実態が徐々に明らかになっており、大戦前後の現代史の単元でも、遺跡活用の有用性を十分に認めることが出来る。更に近現代史ともなると、膨大な資料（絵画・地図・映像・音声・文献資料・写真など）が比較的良好な状態で残存しているため、それらを考古資料と組み合わせながら教材化することにより、現代史に対する興味関心を抱かせ、歴史的思考力を育成することが可能となるはずである。

最後に、本研究に着手し感じた率直な感想は、日頃、日本史教師として教育実践にたずさわっているにも関わらず、教材の中に遺跡が登場するのは当然認知していたが、実にこれほどまで膨大な数の遺跡が紹介されていることには気付かなかった、ということである。普段、教材として使用している教科書・図説などを 1 ページずつ丹念に読み込み、掲載されている遺跡のデータを集めていくという地道な作業を通して、改めてその事実に驚いた。

次に本研究を通じて得られた課題を提示したい。それは、これほどの多くの発掘調査・考古学の成果が掲載されているにも関わらず、実際の授業の場では、それらを十分に活用しきれていないという点である。ではその活用が不十分な理由、背景とはどのようなものなのだろうか。このことについて以下考察してみたい。比較のために文献資料と合わせて検証することとする。

まず文献資料であるが、例えば、平安時代末期、武士の黎明期における平氏政権の繁栄を理解する際によく用いられるのが、『平家物語』の以下のくだりである。

「六波羅殿の御一家の君達といひてしかば、花族も栄耀も面をむかへ肩をならぶる人なし。されば入道相国のこじうと、平大納言時忠卿ののたまひけるは、『<u>此一門にあらざらむ人は皆人非人なるべし</u>』とぞのたまひける。(中略) <u>日本秋津嶋はわずかに六十六箇国、平家知行の国三十余箇国、既に半国にこえたり。其外庄園田畠いくらといふ数を知ず。</u>」（下線、筆者）

この文献資料をすべて読まなくても、下線部を抜粋して読解することにより、当時の平氏政権の占める絶大な権勢を想像することが可能である。つまり文献資料は記されている文章を解釈することが出来れば、当時の歴史的事象をある程度、理解することが可能となる。こうした資料の持つ「簡潔性・実利性」は、実は高校日本史の授業においてはきわめて現実問題として重要な位置をし

めており、特にその傾向は進学校と称される高校ほど大きい。

学校現場ではすべての授業は年度当初に作成される「年間指導計画」に基づき実施される。そして、その指導計画に沿って授業を進める際に重要となってくるのが、授業進度である。大学入試との関係もあり、授業を実践する上でこの授業進度を遵守することは極めて重要な条件となる。そうしたこともあり、歴史資料を扱うにもその解釈に多くの時間をかけることが出来ない、という現実問題があるため、文献資料のような簡潔に歴史的事象を解釈できる資料が好まれ、授業で重宝されるという実態がある。

こうした文献資料の実態に対して考古資料についても同様に、以下の事例からその問題点を考察してみたい。

日本では5世紀に土師器に加え、須恵器が使用しはじめることを「古墳時代の人々の生活」という単元で学習する。焼成技術が朝鮮半島から伝来し、そのことと同時に朝廷内における渡来系の人々の活躍を理解する上で、須恵器の伝来はきわめて重要な歴史的事象となっている。そのことを理解するためには、従来の土器である土師器との相違について考察を深めることが重要であり、そうした意図で教材では、大庭寺遺跡（大阪府堺市）の須恵器窯の全体写真が紹介されている。大阪府文化財センターが発掘調査した際の完掘状態の遺構写真である。中央にベルトが残された状態で、さらに複数のトレンチも掘られ、写真に写り込んでいる。はたして、発掘調査を経験していない教員がこの遺構写真を見て、すぐに須恵器窯がイメージできるであろうか？焼成部・灰原・焚き口・煙道などの窯の基本構造を理解するには到底及ばず、おそらく多くの教員はベルトとトレンチの意味さえ判断できず、それらを須恵器窯の遺構の一部として判断してしまう可能性も十分ありうる。つまり、考古資料を歴史事象につなげるためには、ある程度の考古学・発掘調査に関する専門知識が必要であり、解釈に時間と手間を要しなければならないという実態がある。文献資料に備わっている簡潔性・実利性という学校現場における資料活用において最も重視される要件が、考古資料には不十分なのである。こうしたことが、蓄積された教材の中にみられる多くの遺跡を、日頃の授業のなかで十分に活用しきれていない主たる背景であると考えることが出来る。

そこで最後に、前述の課題を踏まえ、解決に向けての具体的な方策について提言をおこなうこととする。

まず歴史的思考力を養うことを目的とした場合、考古資料の活用は、その有用性は高いと思われる。解釈に時間を有する上に簡潔ではないことから、学校現場では忌避される考古資料であるが、実は遺跡・遺物にじっくりと向き合い、その臨床的な観察態度から時間をかけて紡ぎ出される歴史的事象こそ、歴史解釈の醍醐味ではないだろうか。そうしたことから、学校現場における考古資料の活用にあたり、考古資料の難解さを排除することによって、学校教育関係者に考古資料を身近に感じてもらい、より一層、授業実践での活用が盛んになるような基盤づくりが求められる。今までも学校現場と文化財調査機関の連携は様々な形態で実践されてはいるが、従来の連携から一歩踏み込んだ、つまり日本史学習の各単元に直接活かすことの出来る形態での連携が、実は学校現場で最も必要とされている連携の在り方なのである。そのためには教育の専門家である教員は各単元のねらいについて研究し、そのねらいにせまることのできる考古資料を活かした教材開発をすすめ、同時に遺跡を素材とした効果的な指導方法について検討を重ねていく必要がある。その一方で文化財行政の専門家である文化財調査機関は、学校教育現場で求める単元のねらいへとつながる適切な考古資料を提案し助言を与え、教材へと加工するプロセスにおいて専門的見地から支援をすることが必要となってくる。こうした両者の役割が達成され、機能的に動き出せる基盤が整うことによって、学校教育現場ならびに文化財行政現場の連携が強化される。そして同時に、これからの時代に向け、それぞれの機関が担う新たな使命を、広く社会に浸透させていくことにつながると思われる。

註

1）今回の改訂は、平成18年に改正された教育基本法や学校教育基本法等の規定にのっとり、平成20年1月の中央教育審議会答申を踏まえ、①教育基本法改正等で明確となった教育理念を踏まえ「生きる力」を育成すること、②知識・技能の習得と思考力・判断力・表現力等の育成のバランスを重視すること、③道徳教育や体育などの充実により、豊かな心と健やかな体を育成すること、の上記3点を基本的なねらいとして行われた。

2）現行の高校日本史教育は、「日本史A」と「日本史B」の2科目で構成されている。本稿でとりあげられている科目「日本史B」は、地理歴史科に属する標準単位数4単位の科目である。平成元年の改訂において、それまでの「日本史」を基盤にして設置された、日本史を原始から現代までを総合的な観点から学習する科目である。一方の科目「日本史A」は、地理歴史科に属する標準単位数2単位の科目である。これは、日本の歴史の展開について、特に近代社会が成立し発展する過程に重点をおいて考察し、世界史的な視野に立って理解させることをねらいとした科目として設置された。

3）石井進・五味文彦・笹山晴生・高埜利彦　2012『改訂版詳説日本史B』山川出版社

4）金箱芳明・嶋崎稔・高田実・瀧沢博和・傳田伊史・水橋多喜男・桃林聖一　2012『日本史のライブラリー』東京法令出版

5）他に分析対象候補として比較検討した図説は、以下のとおりである。
2012『最新日本史図表』第一学習社
2012『ビジュアルワイド　図説日本史』東京書籍
2012『写真資料館　日本史のアーカイブ』東京法令出版
2012『日本史総覧』東京法令出版
2012『新詳日本史』浜島書店
2012『詳説日本史図録』山川出版社

6）例えば黒塚古墳については、33枚の三角縁神獣鏡含む合計34枚の銅鏡が出土したことから、この副葬品は卑弥呼が魏帝から下賜され

た「銅鏡百枚」にあたるとみられ、邪馬台国在所論争の資料として注目されたことなどが知られる。特に大和地方の一部の古墳は、邪馬台国とそれに続くヤマト政権との関わりが深いと考えられ、古墳の観察が当時の中央における政治を理解する材料となることがわかる。

7）例えば板付遺跡についてはその位置が日本全体図の中で示され、「最近では、福岡県板付遺跡など西日本各地で縄文晩期の水田が発見され、水稲耕作がはじまっていたことが知られる。このように一部で稲作が開始されていながら、まだ縄文土器を使用している段階を、弥生時代の早期ととらえようとする意見もある。」と紹介している。後段の、時代区分における学説を紹介しているところなどは大変興味深い。

8）例えば貝塚文化として紹介されている具志原遺跡については、廃棄された貝殻の写真図版とともに、「縄文文化が今日の日本列島全域におよんだのに対して、弥生文化は北海道や南西諸島にはおよばず、北海道では『続縄文文化』、南西諸島では『貝塚文化』とよばれる食料採取文化が続いた。」と説明されている。同様に続縄文文化として紹介されている恵山貝塚においては、上記の解説とともに、遺跡より出土した恵山式土器（函館市立函館博物館蔵）の全体写真が掲載されている。

9）例えば登呂遺跡については、高床倉庫の全景写真と春から夏にかけての稲作の様子を再現した模型、秋の収穫時の様子を再現した模型の写真をそれぞれ掲載し、弥生時代の稲作の作業工程について、以下のように説明している。「①木製の鍬や鋤を使っての田おこし　②田に水を引き、鋤やえぶりを使っての代掻き　③田植え　④水路・畦の補修、除草など　⑤石包丁・鉄鎌による収穫　⑥稲束の状態で高床倉庫に貯蔵　⑦必要な分だけ稲穂を取り出し、竪杵と木臼を使い稲からもみをはずし、ざるでもみがらを飛ばす（脱穀）」。作業工程を文章だけで理解させるのは困難であるが、稲作の再現模型を提示することにより、複雑な工程をイメージしやすくしている好資料である。

10）例えば岩宿遺跡については相澤忠洋氏の人物写真、岩宿遺跡の空撮写真、相澤忠洋氏が発見した尖頭器の全体写真が掲載されており、「1946年に相澤忠洋によって関東ローム層の中から石器が発見され、1949年に学術調査が行われた。日本旧石器時代解明の端緒となる。」と紹介されている。

11）例えば亀ヶ岡遺跡については、壺型土器の全体写真が掲載されており、「東日本を中心に器面を磨いた亀ヶ岡土器が有名。型式が豊富で、特殊な器形も登場。繊細流麗な文様、独特な磨消縄文。多数出土する晩期の代表的な土器は世界的にも優れた技巧を有する。」と紹介されている。

12）出典は、大阪府教育委員会。

13）「貴族の食事」では、数多くの椀に6種類以上の山海珍味が並んでいる一方で、「農民の食事」は米（強飯）中心の粗末な食事の復元模型の写真図版が掲載されている。「貴族の食事」では例えば「生加岐（生牡蠣・刻み葱・二杯酢）」などと、写真だけでは内容が不明瞭なので、文章で解説されており、貴族の食生活の一端を理解するために工夫がなされている。

参考文献

市川昭午・永井憲一　2006 「教育基本法改正論議の問題点」『季刊教育法』150号　エイデル研究所

澤田佳代　2006 「高等学校教育の課題と展望」『日本教育』350号　社団法人日本教育会

谷口直人　2012 「いま新学習指導要領をどう読むか」『歴史と地理　日本史の研究』236号　山川出版社

中家健　2011 「学習指導要領の改訂　日本史Bの趣旨」『歴史と地理　日本史の研究』234号　山川出版社

文部科学省　2000 『高等学校学習指導要領解説　地理歴史編』教育出版